（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　栗本（くりもと）　賀世子（かよこ）

本論文は、『宇津保物語』と『源氏物語』における皇妃とその居所の検討を通して物語の虚構の方法を解明したものであり、構成は３編に分かたれた 14 章から成る。

第 1 編「『宇津保物語』の後宮空間」は、これまでほとんど研究がなされてこなかった『宇津保物語』の後宮殿舎について史実との丹念な照合を行い、史実がよく踏まえられており、史実に反するような設定にも物語の創意が見られることを明らかにしている。『源氏』以後の物語で皇妃の居所として頻出する弘徽殿の名が『宇津保』にはまったく出てこないが、朱雀帝の后宮が弘徽殿を利用していた可能性を指摘し、漢文の素養もあり、男まさりの政治力を発揮しているなどの諸点で、彼女は『源氏』の弘徽殿女御の原型となっていることを論ずる。また史実では仁寿殿が皇妃の殿舎となったことはないにもかかわらず、朱雀帝最愛の女御が仁寿殿の女御とされている点について、平安前期においては天皇の常御所として、種々の宮廷行事の場となることも多かった仁寿殿のイメージを生かしながら、帝最愛の女御として重きをなす女性であることを強く印象づける物語の意図を看取する。

第２編「『宇津保物語』から『源氏物語』への展開」は、『源氏物語』における皇妃の殿舎の設定について、従来この物語独自の工夫とみなされてきたもののなかに、『宇津保』を先蹤としているものが多いことを指摘しつつ、しかもその設定を物語展開に生かしてゆく技法において、『宇津保』よりも格段に複雑化している様相を克明に浮かび上がらせている。

第 3 編「『源氏物語』の後宮空間」は、たとえば玉鬘求婚譚を経て髭黒大将の北の方となった尚侍玉鬘が、宮中の居所として承香殿の東面を宛てがわれ、すでにその西面を居所としていた王女御と棲み分けることになった設定について、承香殿の西面が皇妃の居所とされながら、東面で種々の公事が催され、あるいは後宮女性が宮廷行事を見物する場として用いられた史実を数多指摘し、承香殿東面は後に玉鬘が男踏歌を見物するに至便の場所であったと同時に、その男踏歌が彼女と求婚者たちとの最後の交流を描いて、玉鬘求婚譚の掉尾を飾る場面となるなど、『源氏物語』における後宮殿舎の用い方が、物語展開のあり方と密接に結びついた高度な技法的成熟を見せていることを論証する。

本論文は物語の後宮殿舎について、たんに史実との合致や齟齬の考証に止まるものではなく、史料の精細な考証と物語本文の丹念な読解とを有機的に結びつけながら、物語の虚構の方法を解明したものである。物語の読みにおいて、やや史実の側に引き寄せすぎたような解釈や深読みと思われる点もなしとしないが、後宮殿舎に関する従来の研究にも新見を加え、かつ『宇津保』から『源氏』への継承と深化の諸相を明らかにした功績はまことに大きい。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。